

大阪大空襲にあつて

八尾市 安部 睦子(93歳)

私は生協にお世話になつてゐる組合員でございす。私は大正生まれ当年で93歳となりました。私達の年代は女学校3年生頃から戦争を感じ、白衣を縫つたり、傷ついた兵隊さんの慰問に行つたり、慰問袋を送つたり、戦が激しくなると、勝つまでは一致団結で食べる物もなく、空腹の口々でした。多くの若い男女は大変。男性は戦地へ、女性は食・衣に困り、毎日来るB29の攻撃を受けた大阪は焼け、大阪駅前など死者が重なつていました。まさに地獄の絵を見ているようです。

私自身京橋で敵機来襲に遇い、やつこの思いで鶴橋まで来たら、電車が動かず逃げろと言われ、鶴橋の地上で防空壕に入り大丈夫と思つていたら、地上は火の海。偶然同じ所でいた男性から「逃げよう。火を見たら女性に狂うから、しっかりして」と教えられ、出たら火の海。B29が爆撃焼夷弾を落とし一歩も進めない。その時もう1人の女性が今里に行くといわれ、3人で火のない方向に煙の中を男性の指示で逃げましたら、もう1人の女性は今里は焼けていると火の中に進まれるので、2人で行かないでと言っているのに火の中に入つて行かれました。女性はすでに気をなくされていたと思います。それから私達は布施に来ましたら火の海、衣類も熱くなり火の海の中では水をかぶれと教えられ、水をかぶつて火の中を歩きわが家に着いたのは夜の1時頃。電車が動かないため、懸命に家に着きたいと見知らぬ男性を頼りに帰宅しました。その男性は奈良県の方で電車が動くまでわが家の母がいない米を使つて食事をしてもらいました。私にとっては命の恩人と思ひ、今も感謝しています。

都会人の私達は食糧もなくヤミ米も買えない、金も通用しない物々交換のため、持つていた着物など食べ物に変え、最後は馬などに与えられるような物を食べ命をつなぎました。最終はヤミ市には珍しい物を売っている。しかし金はない。法律はきびしい法律を作り、

ヤミ米を買えない。裁判官が法を守つて死亡されました。私達の年代の多くの人々の尊い命をなくされました。現在生き残り人の命をなくす戦争はどのような理由であつてもしてはいけないことを声を大にして戦争を知らない方に伝えたいとペンをとりました。毎日平和をと老人は祈り続けています。

私の戦争体験

堺市 西川 美智子(75歳)

私は今年75歳になりました。光陰矢のごとしと言いますが、月日の経つのは早いもので、気持ちには若くても体力の限界を感じる今日この頃です。

さて、私は、大阪梅田阪急百貨店のそばで生まれました。前は原っぱで兄2人がキャッチボールをして遊んでた平和な時代。誰が戦争で運命を狂わされると想像したでしょうか。大阪空襲で、あの辺は火の海となり命からがら母の里の門真市(当時は村)へ疎開しました。段々戦争も激しくなり、父は庭に大きな防空壕を掘りました。空襲警報のサイレンが鳴りB29の飛行機の轟音がしてくると、家族中が防空壕に逃げ込みました。或る日、凄じ地響きが生きて家中のガラスが割れ、家もつぶれたんじゃないかと思う様なショックを受け、後から村中の人が見に行くと、焼夷弾が落とされ、田んぼに2つ大きな池が出来てました。もう少しのところで、家族全滅するところでした。昭和20年4月、今度は父の郷里である奈良県五條市の田舎へ疎開しました。姉は女学生でしたが、軍需工場で働いていたため、祖父母と共に門真に残りました。世話になった親族の人達も今や亡くなり、従妹と年に一度は逢い当時は懐かしんでいます。

父は大工だったので、広い家を建て生涯をこの地でと思つたのでしよう。昭和22年牧野村

慰問
辛(つら)い境遇(きようぐう)の人や、災害(さいがい)・病氣(びやうき)で苦しい人などを見舞(みま)うこと。戦争中、兵士などを慰(なぐさ)め、士氣(しき)を鼓舞(こぶ)するために兵士のもとへ行つていた。

敵機来襲
敵の飛行機などが来て、襲(おそ)い、攻(せ)めてくること。

防空壕
敵の航空機の攻撃から避難(ひなん)するために地下につくられた穴や施設(しせつ)のこと。

爆撃焼夷弾
敵の建造物(けんぞうぶつ)や陣地(じんち)などを焼き払うために使用される爆弾や砲弾(ほうだん)。中に入っている焼夷剤(しょういざい)が燃焼(ねんしょう)することで対象物(たいしょうぶつ)を火災に追い込むのが目的で、木造(もくぞう)の日本家屋(にほんかおく)を効率(こうりつ)よく焼き払うために使われた。

光陰矢のごとし
月日(つきひ)の過(す)ぎるのは、矢(や)が飛んで行くように早いというたとえ。

大阪空襲
1945年3月から8月にかけて8回行なわれたアメリカ軍による大阪市中心とする無差別爆撃(むさべつばくげき)のこと。これらの空襲で一般市民一万人以上が死亡したと言われている。

空襲警報
敵軍(てきぐん)航空機による空襲を市民に知らせ、被害が出ないよう発令される警報(けいほう)のこと。ラジオやサイレンなどさまざまな手段(しゅだん)で伝達(でんたつ)される。

軍需工場
武器・弾薬をはじめとする軍需品(ぐんじゆひん)を開発(かいぱつ)・製造(せいぞう)・修理(しゆり)・貯蔵(ちよぞう)・支給(しききう)するための施設。

小学校に入学。4キロの道を通学しました。靴は無く、わら草履で、カバンも母の着物をつぶして、服と揃いで作ってくれた物でした。昭和20年8月15日終戦となりましたが、物の無い時代、畑を借りて野菜を作ったり、母の着物は米と交換したりで、両親は苦労しました。大阪へ戻って勉強したいと2人の兄の説得で父も同意してくれて、門真へ帰って来ました。家を焼かれ、多くの死者を出し家族が路頭に迷い、虫けらの如く殺す戦争の悲惨さ！もう二度と戦争は絶対してはなりません。

堺大空襲の火中を逃げて

河内長野市 今村 早智子(83歳)

現在の堺区、阪堺線の宿院近辺に、私達二家族は、戦争当時住んでいました。昭和17年8月1日に、それぞれの家に女の子が生まれました。孝子と圭子です。二人は従姉妹どうし、孝子は私の3番目の妹です。

昭和20年7月10日午前1時半、焼夷弾の降る音で始まったのが堺の大空襲です。当時、女学校2年の私が驚いて家の外へ出たら、西の空は真っ赤でした。焼夷弾が雨のように降って、堺の旧市内は焼失しました。

我が家では、母が孝子をおんぶし、私が貴重品や先祖の位牌などを入れたリュックを背に、妹や弟と共に開口神社へ逃げました。警防団員だった父と第一幼稚園で合流しました。父は自転車組で、1年生の弟を背にくくりつけ、みんなで境内の火の中を逃げました。

境内を大勢の人々と共に逃げ惑っているうちに、母の背に居た孝子は「熱いよう、お家へ帰ろうよ」と泣き出しました。後ろにおられた方が「お子たち火傷をしてはりますよ」と教えて下さいました。なんと左の脹脛に火傷を負っていたのです。一夜が明けて、市役所の救護

所にて、手当を受けました。

圭子の家は、我が家より西、通称「新天地」にありました。探しに行った母の兄が見たものは、圭子を含めた一家四人の焼死体だったのです。伯母の背での死、金歯で伯父とわかったとのこと、もう一人の従兄弟も勿論一緒でした。

圭子にはもう一人兄が居ました。沖繩で戦っていて、20年の秋にアメリカを経由して復員しましたが、帰ってきた堺に家族は居ませんでした。

我が家では、私のすぐ下の妹だけが、学童の集団疎開で家を離れていたもので、火の中をくぐりませんでした。

以上が二家族の戦争空襲体験です。二度と戦争をしてはなりません。

私の戦争体験

河内長野市 山口 康雄(77歳)

1938年5月、父の仕事の関係で朝鮮の平壤(現北朝鮮・ピョンヤン)で生まれた私は小学校1年生の夏休みの1945年8月15日に終戦を迎えました。学校での勉強の記憶はありません。行軍で体を鍛えておりました。

終戦直後にソ連軍が進撃して来て、家、家財を没収されました。家族5人、市内の日本人のお寺に逃れ、他の9世帯と共同生活を始めました。

食事はともに取れず、糠を食べ苦しくて吐き出した事もありました。

38度線以南の南朝鮮はアメリカ軍が支配したため、日本人の引揚げは可能でしたが、ソ連軍支配の北朝鮮は自由に内地に引揚げる事は不可能でした。引揚中に多くの日本人が殺されたとともに耳にした事がありました。

路頭に迷う
生活の道をなくし、住む家もなく、ひどく困ること。

位牌
死者の戒名(かいみょう)、法名(ほうみょう)を記した木牌(もくはい)のこと。

開口神社
堺市堺区にある神社。通称「大寺」。地元では「大寺(おおてら)さん」とよばれ親しまれている。

脹脛
膝(ひざ)から下、足首から上の部分のこと。すねの後方のふくらんだ部分。

復員
兵員の召集(しょうしゅう)を解除(かいじょ)すること。また、兵役(へいえき)を解(と)かれて帰省(きせい)すること。

行軍
部隊(ぶたい)が次の目的地に向かつて、自らの機動力(きどうりょく)で移動すること。

引揚げ
日本の敗戦まで、日本の植民地(しよくみんち)や占領地(せんりょうち)での生活をしてた一般日本人が、日本本土に戻されること。